

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	青木 敬
論文題目	カーボ・ヴェルデのクレオール －歌謡モルナの変遷とクレオール・アイデンティティの形成－		
(論文内容の要旨)			
<p>本博士論文は、カーボ・ヴェルデ(Cabo Verde)におけるクレオール・アイデンティティの形成と発展、そしてその特性を、歌謡モルナの分析を通して明らかにするものである。とりわけモルナの歌詞内容の意味とその変遷過程に着目し、異言語文化接触における社会変化のあり方について考察を加えるものである。</p> <p>第1章は、カーボ・ヴェルデの地理的・文化的状況を示す。カーボ・ヴェルデはクレオール社会を形成していると言われるが、北部バルラヴェント諸島では南米（特にブラジル）とヨーロッパの影響が目立ち、また南部ソタヴェント諸島では西アフリカの要素が濃厚である。カーボ・ヴェルデ社会はこの両面を内包している。</p> <p>第2章は、混雑性が、なぜ、そしてどのようにカーボ・ヴェルデにおいてクレオールとして形成されたのかを論じる。奴隷制下において、支配者、奴隷、解放奴隷がカーボ・ヴェルデ社会を構成し、彼らの間で起きた相互接触がクレオール化の元となったことを明らかにした。クレオール化とは、カーボ・ヴェルデ社会において、混雑により支配者＝白人、奴隷＝黒人という二元的な構図を離脱させ、複合的社会の中でカーボ・ヴェルデ人が柔軟性と順応性を獲得していくプロセスであった。また、歌謡モルナを通じてクレオール語が書きことばとして発展したこともアイデンティティ形成に大きな役割を果たした。</p> <p>第3章からは、論点を歌謡モルナにあて、より具体的にクレオール性を考察する。ここではモルナの類型化を行い、5つの時代区分、そして4つの類型を提案する。時代区分は次の通りである。第1期：詩人Eugénio Tavaresの時代（19世紀末から20世紀初頭）、第2期：詩人B.Lézaの時代（20世紀初頭～20世紀中頃）、第3期：詩人Manuel de Novasの時代（20世紀中頃～20世紀末）、第4期：歌手Cesária Évoraの時代（20世紀末～21世紀初頭）、そして第5期：モダン・モルナの時代（21世紀初頭以降）である。またモルナの類型は、モルナ・ソダーデ、批評的モルナ、革命的モルナ、モダン・モルナである。</p> <p>第4章では、モルナの歌詞の特徴を明らかにするため、50曲（各時代10曲）を取り上げ、モルナに顕著に現われる3つの感情、すなわちソダーデ「郷愁」、クレチュウ「愛」、そしてモラベーザ「ホスピタリティ」の意味分析を実施する。分析の結果、これら3つの感情はそれぞれが複合的核概念を形成しており、かつ相互に関係していることが明らかになった。これらは、カーボ・ヴェルデの人々の生きる術として、また美意識</p>			

として存在するのである。なお、カーボ・ヴェルデ語のソダーデは、ポルトガル語のサウダーデ、ブラジル語のサウダーヂと同源であるが、それぞれの社会が内包する歴史が異なるため、同じと考えるわけにはいかない。

終章の第5章では、より正確にこれらの感情を理解するために、まずモルナの伝播過程を辿り、ソダーデ、クレチュウ、モラベータをそれぞれの変遷時間軸に沿って考察する。ソダーデは18世紀には奴隷の心的苦痛を表現しており、それはモルナの伝播とともにブルジュワ層に嗜好され、そのためポルトガルロマン主義の影響を受けた。後にはサン・ヴィセンテ島をはじめ、カーボ・ヴェルデのすべての島に伝播され大衆化されたが、その過程でソダーデは苦痛からロマンチックへと変化し、同時にクレチュウもロマンチック、苦痛から歓喜へと変化して行った。それは苦悩から逃れるための手立てであった。

次に、カーボ・ヴェルデ北西部における島民の日常生活で、これらの用語がどのように用いられているかを、教育学等で確立された研究手法であるコンセプト・マップを用いて分析した。その結果、クレチュウという語は実生活において全く使用されておらず、観光地におけるソダーデやモラベータは観光客に向けての商品と化していることが明らかとなった。

以上の考察から、カーボ・ヴェルデにおいて、伝統として継承されてきたが、不要なものは排除し、そして必要なものを外部から取り入れるというクレオール・アイデンティティの潜在力が明らかとなった。これの柔軟性に富んだアイデンティティの在り方は、接触・混濁を自らの生きる糧とするカーボ・ヴェルデ社会の特性から生まれるものである。

(論文審査の結果の要旨)

本博士論文は、ポルトガル語系クレオール社会を形成しているカーボ・ヴェルデ(Cabo Verde)のクレオールとしてのアイデンティティを、歌謡モルナの分析を通して明らかにすることを目的とする。とりわけモルナで歌われている内容とその変遷過程に着目し、カーボ・ヴェルデにおけるクレオール社会の形成と進展に関して新たな視点を加えるものである。

カーボ・ヴェルデは「緑の岬」を意味し、アフリカ大陸西端のセネガル沖約500kmに位置する人口約51万人の共和国である。カーボ・ヴェルデは15世紀にポルトガル人によって「発見」された。土地は痩せ、乾燥が激しくプランテーションには不向きであったため、その地理的条件を生かし、アフリカ人奴隷を中南米やヨーロッパへ売却する中継地として大きな役割を果たすことになった。大小15の島からなり、南部諸島Sotavento(風下)と北部諸島はBarlavento(風上)に分けられる。1975年にポルトガルから独立した。住民の多くはカトリック教徒である。

本博士論文の学術的意義は以下の4点にまとめることができる。第1点は、クレオールに関して様々な用語が交錯する中で、人間に関しては、元々奴隷を表す用語であったことを明らかにしたことである。そして、歴史学者Carreiraと言語学者Coutoの研究を総合し、クレオールを形成したのは、主としてランサードスと呼ばれるヨーロッパを「追放」された男性と、タンゴマスと呼ばれる西アフリカ出身の奴隷であった女性から生まれた子供たちであったと結論する。そして、カーボ・ヴェルデにおいてはピジンという用語はなく、ごく初期から社会の中心はクレオールであったと推測する。

カーボ・ヴェルデは、歴史的・地理的に様々なものが混淆しやすい状況にあった。しかし混淆は一様ではなく、様々な地域から何波にも及ぶのである。カーボ・ヴェルデ人は、複合社会の中で自然と、柔軟性・順応性を獲得し、それが彼らの言語文化に反映される。そこでは混淆は強制ではなく、むしろ当然として受け入れられる。そして彼らは、混淆そのものを用いて自らを変化させる能力を獲得するのである。

学術的意義の第2点は、モルナの時代区分に新たな視点を導入した点である。従来の時代区分は20世紀の後半までしか論じていない。その理由は、著者によれば第一に、これまでは、詩人や作曲家が新たなテーマやリズム、メロディーを作り出しモルナを発展させてきたのに対して、20世紀後半以降は、電子楽器の普及やレコーディングの活発化により、歌手が大きな役割を果たすようになり、変化の主体となってきたことにある。しかしながら、従来の分析では、時代区分において詩人・作曲家に着目するあまり、歌手の視点を見落としていると指摘する。また20世紀末から21世紀にかけて活躍している歌手が、昔のモルナを歌うという傾向がある。そのため20世紀末から21世紀にかけては、モルナにあたかも進展がなかったかのように見えるのである。しかし実際は、伝統

モルナを新たな手段で広く海外に向けて発信するという時代に入ったのである。またジャズやボサノヴァのような海外の音楽的要素を取り入れるということも行われている。以上を考案し、著者はモルナの時代区分に、伝統的モルナ期（第1期から第3期）に加え、第4期：歌手Cesária Évoraの時代（20世紀末～21世紀初頭）と第5期：モダン・モルナの時代（21世紀初頭以降）を付け加える。

学術的意義の第3点は、カーボ・ヴェルデにおいてクレオール性を典型的に表す歌謡モルナの分析を、文献研究と現地調査に基づき、詳細に行ったことである。モルナとはカーボ・ヴェルデ人にとって美意識を表現する心の姿であり、また過酷な生活を生き延びる手段でもあった。モルナに頻出するソダーデ（郷愁）、クレチェウ（愛）、モラベーズ（ホスピタリティ）はそれぞれが複合的概念であり、多様な感情を内包している。しかしながら、著者はコンセプト・マップによる分析を通じ、それらがお互い関連する概念であることを明らかにした。

学術的意義の第4点は、初期のモルナがポルトガル語で書かれていたのに対して、20世紀初頭以降はクレオール語であるカーボ・ヴェルデ語で書かれていることを指摘した点である。カーボ・ヴェルデ語で書くことによって、カーボ・ヴェルデ人は自らのアイデンティティを築いてきた。カーボ・ヴェルデにおけるクレオール・アイデンティティとは、混淆の中に常に新たな意味を見出し、それを生き抜くという生き方である。本研究は、歌謡モルナの分析を通してこれを明らかにした。

以上、本研究は、実地調査をベースに類まれな語学能力を生かし、歌謡モルナの分析を通してカーボ・ヴェルデにおけるクレオール性を考察したものとして高く評価できる。そしてアフリカ地域研究に大きな貢献をなすものである。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年1月27日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。